

# 「アメリカ聖書協会」設立の歴史的背景

肴 倉 宏

## A Historical Background of the Foundation of the American Bible Society

Hiroshi Sakanakura

### 抄 録

本稿は、「アメリカ聖書協会」設立の歴史的背景を18世紀末から19世紀初頭の思想的状況と「イギリス外国聖書協会」設立の影響を中心に述べている。

**キーワード:** 「アメリカ聖書協会」、理神論、ユニテリアニズム、西漸運動、「イギリス外国聖書協会」

(2008年9月17日受理)

### Abstract

This paper explains the historical background of the foundation of the American Bible Society, focusing on the intellectual situation from the end of the 18<sup>th</sup> century to the beginning of the 19<sup>th</sup> century, and the influence of the foundation of the British and Foreign Bible Society.

**Key words:** The American Bible Society, deism, unitarianism, westward expansion, The British and Foreign Bible Society

(Received September 17, 2008)

## 序 論

19世紀前半のアメリカでは、各種の慈善団体、ボランティア団体、社会奉仕団体が数多く設立された。そのような団体の一つとして「アメリカ聖書協会」(the American Bible Society)は1816年にニューヨーク市で設立されている。設立以来、「アメリカ聖書協会」は聖書の印刷、出版、翻訳、配布、普及を事業の中心にしてきた。実際、我々が読んでいる the New Revised Standard Version of the Bible(1989)も「アメリカ聖書協会」の出版である。1816年の設立以来ほぼ200年にわたって聖書の出版や普及活動を続けてきた「アメリカ聖書協会」の存在は、アメリカの社会や文化に大きな影響を与えてきたと言える。アメリカの歴史の中で重要な役割を果たしてきた「アメリカ聖書協会」は、どのような経緯で設立されたのであろうか。設立の経緯を18世紀末から19世紀初頭に掛けてのアメリカの思想的状況と「イギリス外国聖書協会」(the British and Foreign Bible Society)設立の影響を中心に述べてみることにする。

### 1. アメリカ聖書協会設立の思想的状況

Thomas Paine の *The Age of Reason*(1794-95) の出版が、「アメリカ聖書協会」設立の思想的背景の一つになっている。この本の中で Paine は、“one God” (7) を信じ “happiness beyond this life” (7) を願うけれど、いかなる宗教のものであれ “the creed” (8) は信じないと言う<sup>(1)</sup>。さらに、彼は教会制度が “to terrify and enslave mankind, and monopolize power and profit” (8) を目的に作られたと述べる。彼は教会と教義を徹底的に批判する。Paine によれば、神の言葉は “the Creation” (32) の中に存在するのだから、神を知りたいのなら “Search not in the Book called the Scripture… but the Scripture called the Creation” (33) と勧める。聖書を読むより宇宙を観察せよと彼は言うのである。人間は “the exercise of reason” (33) によって創造者なる神を見いだせると言っ、Paine は人間の理性に全面的に信頼を寄せる。天文学が最高位を占める “natural philosophy” (37) こそが “the study of the works of God, and of the power and wisdom of God in his works” (37) であり “the true theology” (37) であると主張する。彼は、理性と自然科学を神認識の手段として高く評価しているのである。

Paine は合理主義や自然科学に基盤を置いた理神論の立場から啓示の書である聖書を批判する。聖書の半分以上は “the obscene stories, the voluptuous debaucheries, the cruel and torturous executions, the unrelenting vindictiveness” (20) で占められているので, “the word of God” (20) と言うよりは “the word of a demon” (20) と呼ぶべきだと彼は言う。さらに、彼は聖書を “a book of lies, wickedness, and blasphemy” (93) と批判し、聖書の各書を取り上げて手厳しく論評をしていく。たとえば、創世記のイブと蛇の物語やノアの箱船の話は、まるで面白くもない “the Arabian tales” (91) だし、ヨシユア記は “a military history of rapine and murder” (95) にすぎない。新約聖書は, “a farce of one act” (147) の

ようだし、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書を仔細に調べると“so many and such glaring absurdities, contradictions and falsehoods” (161) だらけである。旧約聖書が教えることは、“rapine, cruelty, and murder” (181) だし、新約聖書が教えることは“to believe that the Almighty committed debauchery with a woman engaged to be married, and the belief of this debauchery is called faith” (181) である。Paine は“the Bible and Testament are impositions and forgeries” (190) と批判し *The Age of Reason* を締めくくっている。彼は、旧新約聖書を全く信用出来ないでっち上げの書と断罪している。

Paine の *The Age of Reason* は、大きな反響を巻き起こした。*The Age of Reason* は、アメリカで10年間に21回再販され多くの人々に読まれた<sup>(2)</sup>。実際、1797年だけでも Paine のこの本は、100,000冊売れたと言われている<sup>(3)</sup>。聖職者たちや敬虔な一般信徒たちは、*The Age of Reason* が多くの読者を得ていることを知るとそれに反論する書を出版している<sup>(4)</sup>。たとえば、アメリカ政府の要職に就いてきたばかりか1816年に「アメリカ聖書協会」の初代会長に就任することになる Elias Boudinot は、長老派の一信徒であるが、1801年に *The Age of Revelation, or The Age of Reason Shewn to Be an Age of Infidelity* を出版している<sup>(5)</sup>。Boudinot は、Paine の本を不信仰の書であると批判している。多くの聖職者たちやキリスト者たちは、*The Age of Reason* の出版によってアメリカ国民の間に理神論やひいてはキリスト教への不信仰が浸透していくことを恐れていたのである。

18世紀から19世紀への変り目の思想的状況を示すもう一つの出来事は、1800年の大統領選挙である。連邦党は第二代大統領 John Adams を候補者にした。対する共和党は Thomas Jefferson を大統領候補にたてた。1800年の選挙は、両候補の政治や外交政策を巡って争われただけでなく、宗教観に関しても議論された。Jefferson は自分なりに聖書を編集して読んでいた。彼はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書から抜粋し、神学に関する部分の多いパウロの書簡集や神秘主義的なところがある黙示録を省いて編集していた。彼はイエスの本当の教えを見つけ、イエスの人柄を示そうと考えていた。Jefferson は、キリスト教を信仰というよりは哲学や道徳的な教えとみていた。彼は、信仰、教理、感情より道徳、理性、知性を強調している。彼はイエスを神的な存在と見なさず、人間の中で一番偉大な人物として尊敬している。そのため、Jefferson の編集した聖書にはイエスの復活や昇天に関する記述は含まれていない<sup>(6)</sup>。Thomas Jefferson も Thomas Paine と同様に理神論者なのである<sup>(7)</sup>。

ニューヨーク市の牧師 John Mitchell Mason は、“The Voice of Warning to Christians” という説教を1800年の選挙の時に出版し Jefferson を批判している。彼は、来るべき選挙について次のように言う。

A crisis of no common magnitude awaits our country. The approaching election of a president is to decide a question not merely of preference to an eminent individual, or particular views of policy; but, what is infinitely more, of national regard or disregard to the religion of Jesus Christ.<sup>(8)</sup>

Mason は選挙の意義を国家としてキリスト教を無視するか尊重するかを決することで

あると言う。こう述べたすぐ後で、彼は、“I dread the election of Mr. Jefferson, because I believe him to be a confirmed infidel.” (1453) と自分の立場を鮮明にする。続けて、彼は、Jefferson が信仰を持たない人物であることを示すために *Notes on Virginia* を取り上げて Jefferson の奇跡や人間の起源に関する考え方を批判していく。さらに、彼は *Notes on Virginia* の質問17「バージニアに受け入れられた各種の宗教について如何」を取り上げる。質問17に Jefferson が「政府の合法的な権限というものは、他人を害するような行為に対してのみ及ぶものである。しかし、たとえば私の隣人が神の数は二十もあるといっても、あるいは神は存在しないのだと言っても、私には少しも害を及ぼすことはない。それは、私の財布を奪うこともないし、私の脚を折るようなこともない。」と答えている箇所がある<sup>(9)</sup>。Mason はこの箇所の Jefferson の言葉を取り上げ批判する。

Ponder well this paragraph. Ten thousand impieties and mischiefs lurk in its womb... This is nothing less than representing civil society as founded in atheism. For there can be no religion without God. And if it does me or my neighbor no injury, to subvert the very foundation of religion by denying the being of God, then religion is not one of the constituent principles of society, and consequently society is perfect without it; that is, is perfect in atheism. Christians! what think you of this doctrine? Have you so learned Christ or truth? Is atheism indeed no injury to society? (1461)

Mason は無神論者が大統領になることは社会の基盤を破壊し有害であると主張する<sup>(10)</sup>。Mason の Jefferson 批判の背後には、アメリカのアイディンテテーの問題が潜んでいる。アメリカは、John Locke の主張した社会契約を支えとして成立した国家ではなく、それよりも古く神聖な神との契約によってできた国家であると聖職者たちは認識していた。さらに、聖職者たちは宗教を個々人の良心の問題であると同時に公共政策の問題でも考えていた。そのため彼等は、共和制に対する最大の脅威は不信仰や無神論であると見なしていたのである<sup>(11)</sup>。

19世紀初頭の思想的状況を示すもう一つの出来事は、Harvard 大学の Hollis 講座の教授就任の問題である。1792年に David Tappan は Harvard 大学の Hollis 講座の教授に就任した。彼は Harvard 大学にスコットランド啓蒙哲学を導入した人だが穏健なカルビン主義者であった<sup>(12)</sup>。しかし、不幸なことに Tappan は1803年に死んでしまうのである。彼の死後、リベラルな教授たちとカルビン主義正統派を任じる教授たちは、誰を Tappan の後継者にするかで論争する。1805年に後継者として Unitarian の Henry Ware が Hollis 講座の教授に就任する。Unitarian は Thomas Paine のような理神論者と一線を画している。理神論者が啓示宗教を否定し自然宗教を信奉するのと対照的に、Unitarian は自然宗教と啓示宗教のどちらも重要であり自然宗教と啓示宗教は互いに補い合うと主張する<sup>(13)</sup>。理神論者を批判するけれども、Unitarian は人間が生まれながらに墮落しているという人間の墮落性の教理やキリストが神であると同時に人間であるという三位一体の教理を受け入れない。このようにカルビン主義を支えている重要な教理を否定する Unitarian は、教理よりも倫理を重視する<sup>(14)</sup>。彼等はキリストの十字架の死が人間を罪から解放したという贖罪論の教

理を拒否する。しかし彼等はキリストを人間に与えられている能力を発揮する自由を与えた人として尊敬する<sup>(15)</sup>。Charles Lyttle は Unitarian の Henry Ware が Hollis 講座の教授に就任したことについて “every one of the distinctive tenets of Amesian orthodoxy save that of congregational polity would be abandoned.” と述べている<sup>(16)</sup>。1805年の Henry Ware の就任以後、カルビン主義を捨てた Harvard 大学は Unitarian の牙城になるのである。

Jedidiah Morse は1805年から1835年まで続く Unitarian 論争の第一期目の主要な論客として Unitarian を批判する。Conrad Wright は Unitarian 論争の第一期目を1805年から1815年までとしている。この第一期目の重要な出来事の一つは、1805年に Morse が the *Panoplist* という雑誌を創刊しそれを通して Unitarian 批判を展開していくことである<sup>(17)</sup>。Henry Ware の就任後ただちに、Morse は *The True Reasons on which the Election of a Hollis Professor of Divinity in Harvard College, was opposed at the Board of Overseers* と題したパンフレットを出版する。彼はその中で Harvard 大学のスクールモットーである「キリストと教会のために」(“Christo et Ecclesiae”) と Hollis 講座の教授にカルビン主義正統派の人を任命すべしという Thomas Hollis の言葉を引用したうえで、選考委員会が Henry Ware の信仰を吟味したのか疑問だと言う。そして Henry Ware の書いた教理問答集と彼がモデルとして用いた Dr. Watts の教理問答集を比較して、“the depravity of human nature, the impotency of man, the character of Jesus Christ, and the future state of the wicked” などの点に関して Dr. Watts の教えとあまりにも違うので、Morse は Henry Ware をカルビン主義者と思えないという<sup>(18)</sup>。Morse はカルビン主義正統派でない Henry Ware を Hollis 講座の教授にしたことで「キリストと教会のために」奉仕することを目的にした大学と教会に悪影響がもたらされることを懸念しているのである。さらに、Morse はイギリス人 Thomas Belsham が書いた *Life of Theophilus Lindsey* の一つの章を *American Unitarianism* と題をつけて1815年に出版する。彼は、ニューイングランドのリベラル派は Belsham 流の Unitarian であることを印象づけようとする。その上、彼は、友人の Jeremiah Evarts に *American Unitarianism* の書評を書かせ、それを the *Panoplist* に掲載する<sup>(19)</sup>。このように Morse は Unitarian にたいする批判を強めていくのである。

アメリカの思想的状況だけでなく国土の拡大と移住の増大もアメリカ社会のキリスト教的な絆を弱めていく心配をもたらしていたのである。1803年に大統領 Thomas Jefferson は、フランス皇帝ナポレオン・ボナパルト (Napoleon Bonaparte) との間で「ルイジアナ購入」(the Louisiana Purchase) に合意した。これによってアメリカは、ミシシッピー川からロッキー山脈までの広大な地域を国土に加えることになった。アメリカ人は、「ルイジアナ購入」以降、徐々にアレゲーニ山脈 (the Alleghenies) を超えて西部へ移住していくのである。1803年にはオハイオが州に昇格、1812年にはルイジアナが州に昇格している。また、1803年にはインディアナが、1809年にはイリノイが、1812年にはミズーリが、準州になっている。人口も主に自然増によって1800年から1815年までに5,300,000人から8,500,000人に増えている。1812年までには旧北西部 (the Old Northwest) を除いてミシシッピー川の東側は、人の住んでいない地域はなくなってしまったのである<sup>(20)</sup>。広大な国土を獲得したことは、

キリスト教の伝道・布教する地域が広がったことでもある。アレゲーニ山脈の西への人々の移住とその地域での人口の増大は、多くの伝道者を必要とすることになる。しかし、大学教育を受けたうえで定住して牧会に専念する牧師や伝道者の数は、急速な人口の増大に追いつかなかったのである。その結果、アレゲーニ山脈の西に住む人々の宗教・倫理的状況は、東部沿岸地域に住む人々の宗教・倫理的状況に比べ配慮の行き届かない状態になっていたのである。

Samuel J. Milles たちのアレゲーニ山脈の西への伝道旅行の報告書は、西部の人々のキリスト教信仰に対する実態を伝えている。Milles は、「アンドーバー神学校」(the Andover Theological Seminary)の学生時代から外国伝道を志すほど、キリスト教の布教・伝道に熱心だった。彼は、「アメリカ海外伝道協会理事会」(the American Board of Commissioners For Foreign Missions)の設立に係った一人でもある<sup>(21)</sup>。しかし、外国伝道の願いにも係らず、彼は主にアメリカ国内で布教活動をするようになる。Milles は、1812年に John F Schermerhorn と一緒にシンシナティからニューオリンズまで伝道旅行をしている。彼は、1814年から1815年にかけて Daniel Smith と第二回目の伝道旅行に出かけている<sup>(22)</sup>。Milles たちの二回の伝道旅行の目的は、“to preach the gospel to the destitute,-to explore the country and learn its moral and religious state,-and to promote the establishment of Bible Societies, and of other religious and charitable institutions”である<sup>(23)</sup>。Schermerhorn は、オハイオ州のある地域の宗教・倫理的状況を“Drunkenness and profane swearing are very prevalent in this district, and the Sabbath is greatly polluted, by visiting, hunting, fishing, and neglecting public worship even where they can enjoy it.”と報告している<sup>(24)</sup>。教会のあるところでさえ聖日の礼拝は守られていないどころか、人々は礼拝より狩猟や魚釣りに出かけるといふ始末である。West Tennessee では“gambling, dueling, and horse-racing”も平然と行われていると言う<sup>(25)</sup>。さらに Milles は、ルイジアナ州での衝撃的な体験を報告している。彼は、“There are some American families, in this part of our country, *who never saw a Bible, nor heard of Jesus Christ.*”と述べている。彼は、聖書を見たこともなければイエス・キリストのことを聞いたこともない家族がいることに驚きを隠せないでいる<sup>(26)</sup>。そして彼は、第二回目の伝道旅行の報告書の最後の方で次のように言う。

The whole country, from Lake Erie to the gulf of Mexico, is as the valley of the shadow of death. Darkness rests upon it. Only here and there a few rays of gospel light pierce through the awful gloom. This vast country contains more than a million of inhabitants. Their number is every year increased, by a mighty flood of emigration.<sup>(27)</sup>

エリー湖からメキシコ湾に至るミシシッピ川流域は、キリスト教の福音の光が届かない闇で覆われている地域であると言う。この不信仰の闇の世界に住む人々が、移住によって年々増えている。Milles たちの報告書は、比較的発展し教会も多くある大西洋岸に住むキリスト者に衝撃を与えるだけでなく彼等の西部に対する暗いイメージを形成していくのである。東部の人々は、西部を“squalor, ignorance, and violence”や“savage”と結びつけてみる様になるのである<sup>(28)</sup>。彼等は、西部を経済的にも信仰的にも貧しく遅れた所と



見なすのである。このような西部の存在は、アメリカのキリスト教的絆を弱体化させアメリカ社会を崩壊させるのではないかと多くの人々に不安を抱かせることになったのである。

18世紀末から19世紀初頭にかけてのアメリカの思想的状況は、カルビン主義に基づいたキリスト教信仰を弱体化させる方向へと進んでいった。聖書をねつ造やでっち上げの書と非難する Thomas Paine の *The Age of Reason* は版を重ね、多くの人々に読まれていた。激しい非難の応酬合戦の末、1801年に大統領に就任した理神論者の Thomas Jefferson は、二期8年間国政を導いていくことになる。カルビン主義正統派を任じる教授たちの批判にもかかわらず、1805年に Henry Ware が Hollis 講座の教授に就任したことは、Harvard 大学がカルビン主義正統派と決別していくことを示している。さらに、国土の拡大と移住の増大もアメリカ社会のキリスト教的な絆を弱めていく懸念を生んでいた。国土の拡大や人口の増大に見合うだけの牧師や伝道者の養成ができず、アレゲーニ山脈の西のフロンティアでは不信仰が広まっても手のうちようがなかった。実際、フロンティアに住む人たちは、酒浸りに陥り、博打や決闘を行い、聖日の礼拝を軽視することもあった。18世紀末から19世紀初頭にかけてのアメリカは、あらゆるレベルでカルビン主義に基づいたキリスト教信仰が衰退しアメリカのキリスト教的な将来に不安を抱かせる結果になっていたのである。

## 2. イギリス外国聖書協会設立の影響

キリスト教信仰の衰退を心配するアメリカの人々にとって、「イギリス外国聖書協会」(the British and Foreign Bible Society) の設立は、朗報をもたらすことになったのである。「イギリス外国聖書協会」は、英語及び外国語で書かれた聖書を普及させる目的で1804年3月7日にロンドンで設立された。設立の中心になった人々は、「クラップムセクト」あるいは「クラップムセイント」(the Clapham Sect or Saints) と言われている政治家や裕福な商人たちである。この中に奴隷制度廃止運動の先頭に立った国会議員の William Wilberforce や慈善運動に力を注いだ裕福な商人 Thornton 一族、綿花輸入業者の Joseph Hardcastle たちが含まれている。協会設立に係ったのは、彼等の他に牧師の Joseph Hughes や C.F.A. Steinkopf たちである<sup>(29)</sup>。彼等は、聖書協会設立に必要な情報を集めるために事前にアンケートをしている。たとえば、貧困層の人々には字を読めるか、どのくらいの人たちが聖書をもっているか、聖書を読みたがっている人がどのくらいいるか、貧困層の人々の必要に対応するに何が重要か、自国あるいは外国で熱心に聖書を普及させようとする人がいるかなどを尋ねている<sup>(30)</sup>。このような市場調査をした上で協会は設立されている。

設立に参画した人々は、「イギリス外国聖書協会」を超教派の会員からなる組織にしようとした。彼等は、イギリス国教会員で占められている「キリスト教知識普及協会」(the Society for Promoting Christian Knowledge) と違って、「イギリス外国聖書協会」を教派の枠を超えた人々が参加出来る組織にしようとした。実際、協会の36人の役員は、イギリス国教会の一般信徒15名、非国教会の信徒15名、6名の外国教会の代表から構成されている。

これに加えて3人の幹事もイギリス国教会の聖職者一人、非国教会の牧師一人、外国教会の聖職者一人という具合にバランスをとれるように割り振りしている。協会の実際の運営は、聖職者たちではなく一般信徒が中心に担っていた<sup>(31)</sup>。聖職者たちは、協会の運営に助言を与えるだけで裏方に回っていた。設立に参画した人々は、宗派に係らず誰でも参加出来るように工夫したのである。

超教派を目指す「イギリス外国聖書協会」は、どのような聖書を配るかにも気を配っている。彼等は、「注のついていない」(without note or comment) 聖書だけを印刷出版することにした。前書きや説明文を省き、聖書の正典と認められているテキストだけを印刷出版した。そうすることで無用な神学論争や宗派間の対立を避けようとしたのである。しかも、聖書の英語版は、これまで公的に認められてきたもの、すなわち1611年に出版されたKing James Version (the Authorized Version) を配ることにしたのである<sup>(32)</sup>。

「イギリス外国聖書協会」の代表たちは、イギリス国内だけでなくヨーロッパ大陸をも巡回し各地に聖書協会を設立するよう働きかけた。この働きかけに応じて各地に地方支部が作られていくのである。最初の支部は、「イギリス外国聖書協会」の足下であるロンドンで1805年に設立されている。第二の支部は、1806年にバーミンガムで設立されている。そこでは一般信徒、牧師、市の役職者たちが町中を回って寄附を募り、聖書の予約注文を取り付けていた。こうして得た寄附金や収益をロンドンの本部に送った<sup>(33)</sup>。1816年までに地方支部は、イギリスで177、スコットランドで47ほど設立され聖書の配布と資金集めに協力していた<sup>(34)</sup>。ヨーロッパ大陸でも聖書協会は設立され、「イギリス外国聖書協会」は各地の聖書協会と連携して聖書の普及に努めようとした。実際、ドイツ聖書協会は、1804年5月にニュールンベルクで設立された。その後、オランダやデンマークでも設立されている。1812年には、ロシア聖書協会が設立されている<sup>(35)</sup>。聖書協会の設立の動きは、イギリスから世界へと広がっていくのである。「イギリス外国聖書協会」の設立の歴史的意義は、次のように述べられている。

The foundation of the British and Foreign Bible Society at a meeting in the London Tavern, Bishopsgate, on 7 March 1804, was more than the beginning of a national institution: it was the birth of a world-wide movement of Bible translation, printing, and distribution which was destined to draw into its orbit men and women of many different nations and languages and of most, if not all, Christian traditions.<sup>(36)</sup>

1804年の「イギリス外国聖書協会」の設立は、聖書の翻訳、印刷、出版、普及が世界規模の運動に発展していく最初の重要な一歩なのである。

### 3. アメリカにおける聖書協会設立の運動

Jedidiah Morse は、自分の創刊した雑誌 the *Panoplist* で設立されたばかりの「イギリス外国聖書協会」のことをアメリカの人々に熱心に紹介している<sup>(37)</sup>。彼の紹介によってアメリカ国内でも聖書協会設立の気運が高まっていくのである。アメリカで最初に設立



された聖書協会は、1808年の12月に設立された the Philadelphia Bible Society である。これに続いて1809年5月に the Connecticut Bible Society、同年7月に the Massachusetts Bible Society、11月に the New York Bible Society、そして12月に the New Jersey Bible Society ができる。Morse は「イギリス外国聖書協会」の記事を載せ聖書協会設立の機運を盛り上げただけでなく、聖書協会設立にも参画している。彼は、1809年から1810年にかけての冬を南部で過ごしている。その時に彼はサバンナで the Georgia Bible Society をサウスカロライナで the Charleston Bible Society と the Beaufort Bible Society を設立するのに加わっている<sup>(38)</sup>。そのうえ彼は、the Philadelphia Bible Society のリーダーの一人 Robert Ralston に the Philadelphia Bible Society と the Massachusetts Bible Society が協力してイギリスからステロ版を購入し聖書を安く印刷出来るようにしようと話を持ちかけている<sup>(39)</sup>。Morse は、聖書協会設立運動を通して聖書を普及させることになみなみならぬ思いを抱いていたのである。彼の活動のおかげもあって、1816年に全国組織である「アメリカ聖書協会」の設立までには、100以上の地方聖書協会ができたと言われている<sup>(40)</sup>。

アメリカ最初の聖書協会である the Philadelphia Bible Society は、聖書の配布だけでなく印刷、出版事業にも乗り出していくのである。フィラデルフィア協会は、初め出版社の Mathew Carey に聖書を納入させそれを配っていた<sup>(41)</sup>。しかし協会の会員が聖書を配布するために家庭訪問してみると、聖書をもっていない人が以外に多く、聖書の数足りないことを痛感した。そのため、協会自らが印刷、出版することにした<sup>(42)</sup>。実際、the Philadelphia Bible Society は1812年にイギリスから輸入したステロ版で聖書を印刷している<sup>(43)</sup>。彼等は、最初の3年間で55,000冊の聖書と新約聖書を印刷したのである<sup>(44)</sup>。the Philadelphia Bible Society の努力は重要なことであるけれど、一つの地方聖書協会が聖書の印刷、出版に乗り出したところで、地方の需要も十分満たすことができないし、ましてや全国的な聖書不足を解消できるものでもない。こうして、各地の聖書協会を統括する全国組織の必要性が徐々に認識されるようになるのである。

Samuel J. Mills は、伝道旅行の体験から聖書協会の全国組織の必要性を訴えている。彼は、聖書や伝道用小冊子を第二回目の伝道旅行に出かける時に持っている。彼は、the Massachusetts Bible Society から600冊の聖書、the Female Missionary Society of Boston から100冊の聖書、the Philadelphia Bible Society から約500冊のフランス語訳新約聖書それに the New England Tract Society 出版の15,000冊の伝道用小冊子を与えられている<sup>(45)</sup>。しかし必要とされている聖書数は、圧倒的に多く携えていった聖書の数では賅いきれるものでなかった。聖書不足を痛感した Mills は、全国組織をつくることによって得られるいくつかの利点、たとえば、効率よく資金を集められることや聖書を安く購入し配布出来ることなどをあげて聖書協会の全国組織を設立する必要性を訴えている。彼の訴えは、Jedidiah Morse の1813年10月の the *Panoplist* に掲載されている<sup>(46)</sup>。さらに彼は、1815年に出版した第二回目の伝道旅行の報告書の結論部分で次のように訴えている。

When we entered on the mission, we applied in person to the oldest and wealthiest of these institution, for Bibles to distribute in the western country: but we could not only

obtain one solitary donation. The existing societies have not yet been able to supply the demand, in their own immediate vicinity. Some mightier effort must be made. Their scattered and feeble exertions, are by no means adequate to the accomplishment of the object. It is thought by judicious people, that half a million of Bibles are necessary, for the supply of the destitute in the United States. It is a foul blot on our national character. Christian America must arise and wipe it away.—The existing Societies are not able to do it. They want union;—they want co-operation;—they want resources. If a National Institution cannot be formed, application ought to be made to the British and Foreign Bible Society for aid. <sup>(47)</sup>

彼は、アメリカで最初につくられしかも豊かな資金を持っている the Philadelphia Bible Society でさえフィラデルフィアとその近隣に聖書を配るだけでやっつとであると指摘している。彼は、地方の聖書協会の個別の対応だけでは全国的な必要を満たしきれないことを述べ、地方の聖書協会が一致団結し全国組織をつくることを提案しているのである。しかも彼は、全国組織ができないなら「イギリス外国聖書協会」に頼むしかないと言う。報告書の最後の言葉は、アメリカ人のナショナリズムに強く訴える Mills のレトリックなのである。Mills たちの二回の伝道旅行は、1812年から1815年まで続いた第二次対英戦争の時期と重なっている。この戦争は、ほとんどアメリカの負け戦だったと言われている。その様な状況の中で1815年1月に Andrew Jackson 将軍がニューオーリンズの戦いに勝利を収めたのである。サムエル・モリソンは、「このニューオーリンズの戦いには軍事的な価値は何もなかったが、しかし、この戦いのおかげで未来の合衆国大統領が一人できあがり、第二次対英戦争が栄光の輝きのうちに終わったというので、民間伝説においては過去のすべてのアメリカの敗北が拭い去られてしまうことになったのだ」と述べている <sup>(48)</sup>。ニューオーリンズの戦いの勝利は、アメリカ人のナショナリズムを高揚させたのである。Mills は、アメリカ人の心にみなぎっているナショナリズムに訴え、「イギリス外国聖書協会」の援助を受けずに独力で聖書協会の全国組織をつくり倫理的闇にいる同胞たちに福音をもたらそうと呼びかけているのである。

Samuel J. Mills の訴えに呼応するかのようには、the New Jersey Bible Society の会長をしていた Elias Boudinot は、全国組織の設立のために奔走する。彼は、the New Jersey Bible Society の役員会で決めた全国組織設立の趣意書を1814年に各地の聖書協会宛に送り協力を呼びかけた <sup>(49)</sup>。しかし聖書協会の全国組織設立に対する反応は、必ずしも好意的なものばかりではなかった。アメリカで最初に設立された the Philadelphia Bible Society は Boudinot の提案には賛成しなかったのである。the Philadelphia Bible Society は、イギリスとの戦争中でもあり時期が悪いと言う。これに対して Boudinot は、「イギリス外国聖書協会」がナポレオン戦争の最中に出来たことを指摘し、フィラデルフィアの反対理由は根拠がないと言う。全国組織の前例がないと言うフィラデルフィアの反対理由に対して Boudinot は、the Philadelphia Bible Society 自体がアメリカで前例なしに設立されているのではないかと反論する。フィラデルフィア聖書協会は、全国組織は役に立たない

と言う。Boudinot は、福音を伝える聖書を配る全国組織が役に立たないはずはないと反論している。フィラデルフィア聖書協会は、全国組織の設立総会は害をもたらすと反対する。Boudinot は、各宗派の総会が有害でないし、ましてや、宗派の枠を超えて聖書を配布しようとして集まる人々の総会のどこが有害なのかと論駁している<sup>(50)</sup>。結局、the Philadelphia Bible Society は「アメリカ聖書協会」が出来ても加盟しないで独自の道を歩んでいくのである。1810年に設立された the Baltimore Bible Society は、加盟を巡って協会内部で意見が対立する。加盟反対を表明する多数派に従い the Baltimore Bible Society は「アメリカ聖書協会」に加盟しない。その結果、the Baltimore Bible Society は会員と収入を減らしていくことになった<sup>(51)</sup>。聖書協会の全国組織設立の動きは、いくつかの地方聖書協会に波紋を投げかけたのである。

Boudinot は、1815年にニューヨークのエピスコパリアンの監督 John Hobart にも協力を呼びかけている。Hobart は、the Bible and Common Prayer Book Society を the New York Bible Society が設立される数ヶ月前の1809年の春に設立している。教区の監督が会長を務め、ニューヨーク市のエピスコパリアンの聖職者は職務上 the Bible and Common Prayer Book Society の役員になっている。この協会は、会の名前に示されているように聖書と祈祷書を配布していた<sup>(52)</sup>。彼等にすれば、祈祷書のないエピスコパリアンの信仰はあり得ないと考えていたからである。Hobart は、聖書だけを配る聖書協会を考えている Boudinot の協力要請を受け入れない。それどころか、彼は自分たちの宗派の聖書協会を支援しそれ以外の聖書協会の活動には加わらないようエピスコパリアンの信徒に警告している。エピスコパリアンの一般信徒の一人 John Pintard は、1816年の12月31日の娘に宛てた手紙の中で Hobart の対応を次のように述べている。

Bishop Hobart at the origin of this Institution [the American Bible Society] in May last alarmed the Episcopalians by holding out that the Am. Bible S<sup>o</sup> w<sup>d</sup> swallow them up in the gulph of presbyterianism & warned them against the danger of becoming members.<sup>(53)</sup>

Hobart は、他の宗派の人々との協力体制の中で運営される聖書協会はエピスコパリアンの独自性を弱めてしまうことを心配しているのである<sup>(54)</sup>。このような心配から Hobart は Boudinot の協力要請を拒否するのである。

エピスコパリアンの聖職者や信徒の中には、Hobart の警告を無視して Boudinot の提案に賛同する人達もいた。James Milnor は、エピスコパリアンの聖職者でニューヨークの St. George's Church の牧師をしていた。彼は、「アメリカ聖書協会」の役員だけでなく、「アメリカ伝道冊子協会」(The American Tract Society)にも係る人である。彼は、宗派の枠にとらわれずに活動している<sup>(55)</sup>。一般信徒の代表的な一人は、John Pintard である。彼は、1816年の12月4日の娘に宛てた手紙の中で Hobart の対応を批判して次のように述べている。

It has my best wishes & I sincerely regret that our respectable & right Rev<sup>d</sup> Bishop Hobart has seen proper to oppose it [the American Bible Society]. I think his apprehensions of danger to the Episcopal interest is groundless but his zeal to secure the interests of our

Church has perhaps misguided his judgment.<sup>(56)</sup>

このように監督 Hobart を批判する Pintard は、警告にも係らず「アメリカ聖書協会」の役員の一員として the Recording Secretary and Accountant を務めている。もう一人は、アメリカの初代最高裁判所長官を務めた John Jay の息子 William Jay である。彼は、the Bible and Common Prayer Book Society が聖書と祈祷書を同列に置いているのは聖書の権威に対する侮辱以外のなにものでもないという。彼は、聖書とその要約版である祈祷書との違いを指摘しているのである。さらに、彼は、エピスコパリアンが他の宗派に飲み込まれてしまうという Hobart の心配をも一笑に付する。Jay は、一般信徒の信仰に対する姿勢を信頼していないから監督 Hobart の心配が起きるのだという。彼は、Hobart の姿勢に反民主的な姿勢を読み取るのである<sup>(57)</sup>。監督 Hobart を批判する William Jay は、Boudinot に協力し全国組織を支える会則の草案を書いている<sup>(58)</sup>。Elias Boudinot の努力によって、聖書協会の全国組織設立への熱意は、批判や反対を乗り越えて多くの人々に共有されていったのである。

批判や反対にもかかわらず、多くの人々の熱意に支えられて「アメリカ聖書協会」は、設立された。設立総会は、1816年5月8日にニューヨークの「オランダ改革派教会」(the South Reformed Dutch Church) で開催された<sup>(59)</sup>。Elias Boudinot は、残念ながら体調不良のため設立総会には出席出来なかったけれど、彼の呼びかけに応じて30以上の地方聖書協会の代表60人以上が集まった<sup>(60)</sup>。Unitarian 批判と「イギリス外国聖書協会」の紹介に務めた Jedidiah Morse、Thomas Jefferson を無神論者と批判したエピスコパリアンの John M. Mason、決闘反対運動を展開し社会改良者として有名な Lyman Beecher、参加者中で最年長の Samuel Spring と後にプリンストン神学大学学長になる Gardiner Spring 親子、ニューヘブン神学の創始者と言われている Nathaniel W. Taylor、Union College の学長 Eliphalet Nott たちなどの錚々たる牧師や神学者たちが設立総会に出席している。一般信徒としては、アメリカ最高裁判所書記官をした弁護士 Samuel Bayard が the New Jersey Bible Society の代表の一人として、エピスコパリアンの監督 Hobart を批判し「アメリカ聖書協会」の会則の草案を書いた弁護士の William Jay が the Westchester Bible Society の代表として参加している。それに加えて後に作家として活躍する James Cooper も the Otsego County Bible Society の代表として参加している<sup>(61)</sup>。さらにクエーカー教徒と呼ばれている「友会」(the Society of Friends) のメンバーも設立総会に参加している。監獄制度改革や精神病者のケアに心を砕いた Thomas Eddy、教育者であり化学者として知られている John Griscom、外科医として有名な Dr. Valentine Mott たちが出席している<sup>(62)</sup>。宗派的に見ると、設立総会に参加した人たちは、Congregationalists、Presbyterians、Episcopalians、Dutch Reformed、the Society of Friends や他の宗派から構成されている。「アメリカ聖書協会」は、「イギリス外国聖書協会」のように超教派的団体として出発するのである。

「アメリカ聖書協会」の会則が5月10日に採択されている。第1条は、協会の正式名称と注釈のついていない聖書を広く普及させるという目的を述べている。第9条は、会の運営について次のように述べている。

A Board of Managers shall be appointed to conduct the business of the Society, consisting of thirty-six laymen, of whom twenty-four shall reside in the city of New York or its vicinity. One-fourth part of the whole number shall go out of office at the expiration of each year, but shall be re-eligible.<sup>(63)</sup>

会の運営にあたる委員は、36人の一般信徒からなり、そのうち24名はニューヨーク市あるいはその近郊に住む者と定められている。第9条の規程は、できるだけ聖職者の影響力を排除しようとするものである。と同時に、ニューヨーク市とその近郊に住む一般信徒が協会の運営を速やかに行えるように意図している。第11条は、「アメリカ聖書協会」の年次総会を5月の第二木曜日にニューヨークかフィラデルフィアで開催すると規定している。第14条は、運営委員会を毎月第一水曜日に持つと規定している。「アメリカ聖書協会」は、「イギリス外国聖書協会」と同様に一般信徒が運営の中心的な担い手になるのである。設立総会の出席者たちは、会則を定めアメリカ国民に向けたアピールを採択して数日間にわたる総会を締めくくる。こうして、「アメリカ聖書協会」は正式に発足したのである。

## 結 論

「アメリカ聖書協会」は、1804年設立の「イギリス外国聖書協会」をモデルとして設立されている。設立の目的、会則、運営方法に関しても、ほとんど「イギリス外国聖書協会」をまねている。「アメリカ聖書協会」は、キリスト教信仰の衰退に歯止めをかけ宗教的・倫理的意識を向上させアメリカ社会を支えるキリスト教的な絆を強化する目的で設立されているのである。

## 註

- 1 Thomas Paine *The Age of Reason* (New York: Prometheus Books, 1984) この段落と次の段落の *The Age of Reason* からの引用は、すべてこの版による。なお、( ) 内の数字は、この版のページを示す。
- 2 Henry F May *The Enlightenment in America* (New York: Oxford University Press, 1979) 226
- 3 Paul C. Gutjahr *An American Bible: A History of the Good Book in the United States, 1777-1880* (Stanford: Stanford University Press, 1999) 10
- 4 Henry F May *The Enlightenment in America* (New York: Oxford University Press, 1979) 263-264
- 5 George Adams Boyd *Elias Boudinot: Patriot and Statesman 1740-1821* (Princeton: Princeton University Press, 1952) 252-253, Paul C. Gutjahr *An American Bible: A History of the Good Book in the United States, 1777-1880* (Stanford: Stanford University Press, 1999) 10, Allen Johnson ed. *Dictionary of American Biography* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964) 477-478
- 6 Charles B. Sanford "The Religious Beliefs of Thomas Jefferson" in *Religion and Political Culture in Jefferson's Virginia* ed. by Garrett Ward Sheldon and Daniel L. Dreisbach (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2000) 61-91, Jean V. Matthews *Toward A New Society: American Thought and Culture 1800-1830* (Boston: Twayne Publishers, 1991) 36-37



- 7 Henry F. May *The Enlightenment in America* (New York: Oxford University Press, 1979) 310, Jean V. Matthews *Toward A New Society: American Thought and Culture 1800-1830* ((Boston: Twayne Publishers, 1991) 29 Jefferson は、Thomas Paine のためにアメリカ政府の船を差し向け彼を帰国させ、ホワイトハウスで歓迎している。
- 8 John Mitchell Mason "The Voice of Warning to Christians" in *Political Sermons of the American Founding Era, 1730-1805* edited by Ellis Sandoz (Indianapolis: Liberty Fund, 1998) vol. 2, 1453 この段落の "The Voice of Warning to Christians" からの引用は、すべてこの版による。なお、( ) 内の数字は、この版のページを示す。
- 9 中屋健一訳『バージニア覚え書き』(東京: 岩波書店、1975) 岩波文庫、286
- 10 John C. Miller *The Federalist Era 1789-1801* (New York: Harper and Row Publishers, 1960) 264-266, Paul F. Boller, Jr. *Presidential Campaigns* (New York: Oxford University Press, 1984) 10-18
- 11 Harry S. Stout "Rhetoric and Reality in the Early Republic: The Case of the Federalist Clergy" in *Religion and American Politics: From the Colonial Period to the 1980s* ed. by Mark A. Noll (New York: Oxford University Press, 1990) 62-76
- 12 Daniel Walker Howe *The Unitarian Conscience: Harvard Moral Philosophy, 1805-1861* (Middletown: Wesleyan University Press, 1988) 4 and 32, Sydney Ahlstrom "The Scottish Philosophy and American Theology" *Church History* 24 (1955) 262, Charles Lyttle "A Sketch of the Theological Development of Harvard University, 1636-1805" *Church History* 5 (1936) 328-329, Henry F. May *The Enlightenment in America* (New York: Oxford University Press, 1979) 268
- 13 Conrad Wright *The Liberal Christians: Essay on American Unitarian History* (Boston: Beacon Press, 1970) 10-11, Daniel Walker Howe *The Unitarian Conscience: Harvard Moral Philosophy, 1805-1861* (Middletown: Wesleyan University Press, 1988) 82-84
- 14 Daniel Walker Howe *The Unitarian Conscience: Harvard Moral Philosophy, 1805-1861* (Middletown: Wesleyan University Press, 1988) 5-7, and 101-102
- 15 Daniel Walker Howe *The Unitarian Conscience: Harvard Moral Philosophy, 1805-1861* (Middletown: Wesleyan University Press, 1988) 98
- 16 Charles Lyttle "A Sketch of the Theological Development of Harvard University, 1636-1805" *Church History* 5 (1936) 308
- 17 Conrad Wright "Institutional Reconstruction in the Unitarian Controversy" in *American Unitarianism 1805-1865* ed. by Conrad Wright (Boston: The Massachusetts Historical Society and Northeastern University Press, 1989) 3 and 5
- 18 David B. Parke *The Epic of Unitarianism: Original Writings from the History of Liberal Religion* (Boston: Beacon Press, 1957) 77-80, Joseph W. Phillips *Jedidiah Morse and New England Congregationalism* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1983) 134-136
- 19 Conrad Wright "Institutional Reconstruction in the Unitarian Controversy" in *American Unitarianism 1805-1865* ed. by Conrad Wright (Boston: The Massachusetts Historical Society and Northeastern University Press, 1989) 18, David B. Parke *The Epic of Unitarianism: Original Writings from the History of Liberal Religion* (Boston: Beacon Press, 1957) 83-87, Richard J. Moss *The Life of Jedidiah Morse: A Station of Peculiar Exposure* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1995) 84-86, Joseph W. Phillips *Jedidiah Morse and New England Congregationalism* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1983) 157



- 20 Marshall Smelser *The Democratic Republic 1801-1815* (New York: Harper& Row, Publishers, 1968) 136
- 21 Clifton Jackson Phillips *Protestant America and the Pagan World: The First Half Century of the American Board of Commissioners For Foreign Missions, 1810-1860* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1969) Harvard East Asian Monographs 32, 20-21
- 22 Charles L. Chancey *The Birth of Missions in America* (South Pasadena: the William Carey Library, 1976) 202, Henry Otis Dwight *The Centennial History of the American Bible Society* (New York: Macmillan, 1916) 12-13, Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: the Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 4, Charles I. Foster *An Errand of Mercy: The Evangelical United Front, 1790-1837* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1960) 110, Dumas Malone ed. *Dictionary of American Biography* (New York: Charles Scribner's Sons, 1962) vol. VII, 15-16
- 23 Samuel J. Mills and Daniel Smith *Report of a Missionary Tour through that part of the United States which lies West of the Allegany Mountains; Performed Under the Direction of the Massachusetts Missionary Society. Andover, 1815* in *To Win the West: Missionary Viewpoints 1814-1815* (New York: Arno Press, 1972) 3
- 24 John F. Schermerhorn and Samuel J. Mills *A Correct View of that part of the United States which lies West of the Allegany Mountains, with Respect to Religion and Morals. Hartford, 1814* in *To Win the West: Missionary Viewpoints 1814-1815* (New York: Arno Press, 1972) 15
- 25 John F. Schermerhorn and Samuel J. Mills *A Correct View of that part of the United States which lies West of the Allegany Mountains, with Respect to Religion and Morals. Hartford, 1814* in *To Win the West: Missionary Viewpoints 1814-1815* (New York: Arno Press, 1972) 28
- 26 Samuel J. Mills and Daniel Smith *Report of a Missionary Tour through that part of the United States which lies West of the Allegany Mountains; Performed Under the Direction of the Massachusetts Missionary Society. Andover, 1815* in *To Win the West: Missionary Viewpoints 1814-1815* (New York: Arno Press, 1972) 29
- 27 Samuel J. Mills and Daniel Smith *Report of a Missionary Tour through that part of the United States which lies West of the Allegany Mountains; Performed Under the Direction of the Massachusetts Missionary Society. Andover, 1815* in *To Win the West: Missionary Viewpoints 1814-1815* (New York: Arno Press, 1972) 47
- 28 Jean V. Matthews *Toward A New Society: American Thought and Culture 1800-1830* (Boston: Twayne Publishers, 1991) 9-10
- 29 S. L. Greenslade ed. *The Cambridge History of The Bible: The West from the Reformation to the Present Day* vol. 3 (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) 388-389, Leslie Howsam *Cheap Bibles: Nineteenth-Century Publishing and The British and Foreign Bible Society* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) 3-4, Charles I. Foster *An Errand of Mercy: The Evangelical United Front, 1790-1837* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1960) 34-36
- 30 Charles I. Foster *An Errand of Mercy: The Evangelical United Front, 1790-1837* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1960) 83
- 31 S. L. Greenslade ed. *The Cambridge History of The Bible: The West from the Reformation to the Present Day* vol. 3 (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) 389, Leslie Howsam *Cheap Bibles:*

- Nineteenth-Century Publishing and The British and Foreign Bible Society* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) 7 and 21, Charles I. Foster *An Errand of Mercy: The Evangelical United Front, 1790-1837* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1960) 85-86
- 32 S. L. Greenslade ed. *The Cambridge History of The Bible: The West from the Reformation to the Present Day* vol. 3 (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) 389, Leslie Howsam *Cheap Bibles: Nineteenth-Century Publishing and The British and Foreign Bible Society* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) 6
- 33 Charles I. Foster *An Errand of Mercy: The Evangelical United Front, 1790-1837* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1960) 87-88
- 34 Leslie Howsam *Cheap Bibles: Nineteenth-Century Publishing and The British and Foreign Bible Society* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) 42-43
- 35 S. L. Greenslade ed. *The Cambridge History of The Bible: The West from the Reformation to the Present Day* vol. 3 (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) 390
- 36 S. L. Greenslade ed. *The Cambridge History of The Bible: The West from the Reformation to the Present Day* vol. 3 (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) 388
- 37 Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: The Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 3
- 38 Joseph W. Phillips *Jedidiah Morse and New England Congregationalism* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1983) 119
- 39 Joseph W. Phillips *Jedidiah Morse and New England Congregationalism* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1983) 119
- 40 George Adams Boyd *Elias Boudinot: Patriot and Statesman 1740-1821* (Princeton: Princeton University Press, 1952) 257, David Paul Nord "Benevolent Capital: Financing Evangelical Book Publishing in Early Nineteenth-century America" in *God and Mammon: Protestants, Money, and the Market, 1790-1860* ed. by Mark A. Noll (New York: Oxford University Press, 2002) 154
- 41 Paul C. Gutjahr *An American Bible: A History of the Good Book in the United States, 1777-1880* (Stanford: Stanford University Press, 1999) 29
- 42 David Paul Nord "Free Grace, Free Books, Free Riders: The Economics of Religious Publishing in Early Nineteenth-Century America" *Proceedings of the American Antiquarian Society* 106 (1996) 249
- 43 David Paul Nord "The Evangelical Origins of Mass Media In America, 1815-1835" *Journalism Monographs* 85 (May, 1984) 8, S. L. Greenslade ed. *The Cambridge History of The Bible: The West from the Reformation to the Present Day* vol. 3 (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) 467
- 44 David Paul Nord "Benevolent Capital: Financing Evangelical Book Publishing in Early Nineteenth-century America" in *God and Mammon: Protestants, Money, and the Market, 1790-1860* ed. by Mark A. Noll (New York: Oxford University Press, 2002) 155, David Paul Nord "Free Grace, Free Books, Free Riders: The Economics of Religious Publishing in Early Nineteenth-Century America" *Proceedings of the American Antiquarian Society* 106 (1996) 250
- 45 Samuel J. Mills and Daniel Smith *Report of a Missionary Tour through that part of the United States which lies West of the Allegany Mountains; Performed Under the Direction of the Massachusetts Missionary Society. Andover, 1815* in *To Win the West: Missionary Viewpoints 1814-1815* (New York: Arno Press, 1972) 6

- 46 Henry Otis Dwight *The Centennial History of the American Bible Society* (New York: Macmillan, 1916) 17, Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: the Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 4-5
- 47 Samuel J. Mills and Daniel Smith *Report of a Missionary Tour through that part of the United States which lies West of the Allegany Mountains*; Performed Under the Direction of the Massachusetts Missionary Society. Andover, 1815 in *To Win the West: Missionary Viewpoints 1814-1815* (New York: Arno Press, 1972) 47
- 48 Samuel Eliot Morison *The Oxford History of the American People* (1965)  
西川正身翻訳監修「アメリカの歴史 1 先史時代—1815年」(東京: 集英社, 1983年) 582
- 49 George Adams Boyd *Elias Boudinot: Patriot and Statesman 1740-1821* (Princeton: Princeton University Press, 1952) 258, Charles I. Foster *An Errand of Mercy: The Evangelical United Front, 1790-1837* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1960) 109-110
- 50 Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: The Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 28-31
- 51 Terry D. Bilhartz *Urban Religion and the Second Great Awakening: Church and Society in Early National Baltimore* (London and Toronto: Associated University Press, 1986) 102-103
- 52 Robert Bruce Mullin *Episcopal Vision/ American Reality: High Church Theology and Social Thought in Evangelical America* (New Haven: Yale University Press, 1986) 53-54
- 53 *Letters from John Pintard to His Daughter Eliza Noel Pintard Davidson 1816-1833* vol.1 1816-1820 (New York: Printed For the New-York Historical Society, 1940) 44
- 54 James Elliot Lindsley *This Planted Vine: A Narrative History of the Episcopal Diocese of New York* (New York: Harper and Row, 1984) 115, Robert Bruce Mullin *Episcopal Vision/ American Reality: High Church Theology and Social Thought in Evangelical America* (New Haven: Yale University Press, 1986) 54 and 55-56
- 55 Robert Bruce Mullin *Episcopal Vision/ American Reality: High Church Theology and Social Thought in Evangelical America* (New Haven: Yale University Press, 1986) 91, Elizabeth Twaddell "The American Tract Society, 1814-1860" *Church History*, 15 (June, 1946) 120
- 56 *Letters from John Pintard to His Daughter Eliza Noel Pintard Davidson 1816-1833* vol.1 1816-1820 (New York: Printed For the New-York Historical Society, 1940) 39
- 57 Robert Bruce Mullin *Episcopal Vision/ American Reality: High Church Theology and Social Thought in Evangelical America* (New Haven: Yale University Press, 1986) 56-57
- 58 James Elliot Lindsley *This Planted Vine: A Narrative History of the Episcopal Diocese of New York* (New York: Harper and Row, 1984) 165, Robert Bruce Mullin *Episcopal Vision/ American Reality: High Church Theology and Social Thought in Evangelical America* (New Haven: Yale University Press, 1986) 56-57, Charles I. Foster *An Errand of Mercy: The Evangelical United Front, 1790-1837* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1960) 112, George Adams Boyd *Elias Boudinot: Patriot and Statesman 1740-1821* (Princeton: Princeton University Press, 1952) 259, Peter J. Wosh *Spreading the Word: The Bible Business in Nineteenth-Century America* (Ithaca: Cornell University Press, 1994) 35-37, Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: The Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 7
- 59 Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: the Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South

- Pasadena: William Carey Library, 1977) 1, Henry Otis Dwight *The Centennial History of the American Bible Society* (New York: Macmillan, 1916) 21
- 60 Paul C. Gutjahr *An American Bible: A History of the Good Book in the United States, 1777-1880* (Stanford: Stanford University Press, 1999) 11 では34の地方聖書協会の代表60人、Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: the Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 1-2 では35の地方聖書協会の代表を65人と指摘している。
- 61 Henry Otis Dwight *The Centennial History of the American Bible Society* (New York: Macmillan, 1916) 22-23, Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: The Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 2-3, Lawrence A. Cremin *American Education: The National Experience 1783-1876* (New York: Harper Colophon Books, 1980) 58, Alan Taylor *William Cooper's Town: Power and Persuasion on the Frontier of Early American Republic* (New York: Alfred A. Knopf, 1996) 381-383, James Franklin Beard ed. *The Letters and Journals of James Fenimore Cooper* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1969) vol. 1, 23, Susan Cooper "Small Family Memories" in *Correspondence of James Fenimore Cooper* ed. by His grandson James Fenimore Cooper (New York: Haskell House Publishers, LTD, 1922) vol. 1, 12
- 62 Arthur A. Ekirch, Jr. "Thomas Eddy and the Beginnings of Prison Reform in New York," *New York History* 24 (1943) 371-391, Thomas Bender *New York Intellect: A History of Intellectual Life in New York City, From 1750 To the Beginnings of Our Own Times* (New York: Alfred A. Knopf, 1987) 84-85, Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: The Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 2, Henry Otis Dwight *The Centennial History of the American Bible Society* (New York: Macmillan, 1916) 22-23
- 63 Henry Otis Dwight *The Centennial History of the American Bible Society* (New York: Macmillan, 1916) 26, Creighton Lacy *The Word-Carrying Giant: The Growth of the American Bible Society (1816-1966)* (South Pasadena: William Carey Library, 1977) 11